生き殘れるわが身の程は、何となう、心細くも思はれます、何やかやとて、わが身の上、心配りをなし呉るる他人もなきにはあらねども、儘にわが身を委ぬべき知己、親戚もなき事かと思ひ出づれは出づる程、悲しい事の限りです、』

と云ふて語りしこの述懐、憂愁の眉根もあはれなるに、おのれもえ堪えずなりましたから、私は、

『お爺さん、そんなをはお止しなさいよ、お互に愚痴こぼすのはいけませんから止しませうよ、こんな廣びろとした野原にきたものを、拙きながらも、歌一曲なと呻吟もうでは御座いませんか、もしや貴下の御子息で再び此の世に歸らぬ人とおなりになつて居ると云ふ、切ない事でもおあんなさると云ふ事なら、私や貴下の子息となります、』

と云へば、お爺さんは、はつと私の手を握り、

オロ〳〵聲にて、

『どうしてどうして、左樣な事なぞ、ありませうぞと云へど中には、何か悲哀の種もやあらんと思はれました、

かくて兩人は此の小流の傍を立ち、滑かなる坂途をば辿り〳〵て下りゆき、森の綠葉、茂り合ひ、小羊なぞの行き通ふ逕に歩みを進めてゆきました、とう〳〵レオナルトの巖崖にまできましたころ、お爺さんは讃美歌やら、俗曲やら、物に狂へる調子の如、謠ひながらにゆきました。

憐れな花賣娘

村田錦葉

「花え花え」と如何にも寒むさうに悲しさうな聲を上げて花束を携へながら、京都三條通りを室町

邊へ來るのは年頃十二三の愛嬌のある少女である。

時は丁度一月の寒空に、袖口の破れた襦袢の上に裾の斷れた袷を着て、チラ〳〵雪の降るのに笠も被らず、足袋も穿かないで後斷草履を穿いて居る姿は他目ながら實に可憐想である。

今花賣娘が通行るのを窓から見て居た眼のくりくりつとした丸顏の腕白さうな男の兒が、

「姉上さん姉上さん、件の花賣娘が今來ましたよ呼びませうか、おい花賣娘さん一寸お出でな。」

「はい、有難う厶います何のお花に致しませうか。」

「いやお花もお花だがね、少し要件があるから此所へお入り、」と宅内に呼入れたのは品の佳い學生体な娘であつた。

「お前を呼んだのは外じや無い、之れを一包だけれど呈ふと思つて。」と紙包を與ふれば花賣娘は幾度も推戴き、懷中に納れた、而して顏には凹笑を含んで居た。

「お前の母親は繼母だつて過般云つたが什麼だい可愛つて下れるかえ。」

「はい」

「若し花の賣れない時にや母親樣が叱りは爲ないの。」

「はい花の賣れない時は頭を歐れます、今日は未だ一把も賣れませんから、之れで歸つたら亦母親樣に叱られます。」と雙眼には早や涙含んで居る。

「おゝ僕でも買つてやらあ、可憐想に姉上さん此花皆買つてお遣りなさいな、なあ姉上さん。」

「おいよ買つてやるよ、お前其花を買つて上げる

から心配するにや及ばないよ。」

「有難う厶います。」

言葉は單であるが感謝の意は充分表示はれて居た。

「母樣は何んだつて其樣にお前を叱言るのだらうね、何時もお前を見る度に可愛想だつて皆が噂さして居るのよ。」

「花の賣りやうが細少いとお母樣が大きな目玉を瞋いて、お前は年ばかり大きくなつて五錢や六錢の商事が出來ないのか、幾年だと思つて居るつて怒鳴れます、私は夫れが恐懼ふ厶います、今朝もお茶碗を洗ふ時に過つて一個破滅したら大增責められて頭に此斯な瘤が出來ました。」と泣きながら瘤を撫で丶居た

「本統に殘酷いお母樣だわねー、まあ火鉢で手を暖めな、そうして此嚴寒いのに袷一枚で足袋も穿かないで克く辛抱する事ね。」

「姉上さん此少女に僕の足袋を遣りませうか。」

「はゝゝゝ松雄の足袋では駄目ですよ。」

「綿入や足袋を小兒の時から着るものじや無いて母樣が調製て下さいませんの、過般も父樣が京極から買つて來て下さつた花釵をお母樣が之れはお前には過るつて妹に遣つてしまいましたよ。」と如何にも殘念さうに袖口を口に喰へながら切齒して居る。

「夫れでもお父樣は何もお母樣に言はないのかえ。」

お父樣は何も言ふ所ではありません、お母樣の云ふ通りになさいます、那麼に御飯も三椀より澤山食べると直ぐ叱られます、……若し眞實のお母

樣が今頃居したら斯樣な事はありませんものを何故實母は梅を殘して死亡じまつたでしようか、最一度實母の顏が見たうムいます。」

語る少女より聞いて居る娘の方が一層の悲しみを催して兩袖を顏に推當て歔欷して居つた、娘はつと起つて奥の間から雙子縞の一度ばかり水に浸したやうな綿入を一枚持つて來て。

「お前に此の綿入を上げるから仕立直して着なさい。」と花賣娘に渡した。

少女は餘りの事に有難涙を流して、厚く禮を述べ歸つた。

その后、これを憐れに思つてこの家に花賣娘を下女に使ふことにして、今も尙ほまめ〳〵しく奉公してゐるとのこと、少女の歳は今年丁度十七で名を梅と呼び、妾の聞いた實際の話であります。

東京便り

▲親愛なる讀者諸君諸姉、其後は筆硯愈々御盛大の御事と存じ候。偖も本年は兎角不順勝ちにて、折角の夏休みも大方夏らしき夏なくて相過ぎ申候。海水浴場や温泉場等の避暑地の不景氣なりしは致し方なしと諦め候はんも、全國擧つて稻の平年作を見る能はざるがため、地方の農家の心痛一方ならぬは誠に氣の毒の至りに候。小生の參り候東北地方に於ては、先づ六分作ならんかなど申され居り候。

▲諸君諸姉、前便申上候通り本年當會開設の保育法夏期講習會はまことに都合よく參り候。會する者北は北海道より南は朝鮮、臺灣より殆んど全國の斯道篤志家を吸集致し候。其數百七十名 內、本會々員百五名會員外は六十五名、之を東京と